

Title	日本思想史における『日本書紀』：『日本書紀』注釈史をめぐって
Author(s)	渡辺, 正人
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.17, 2000.3 : 181-209
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3485
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

日本思想史における『日本書紀』

——『日本書紀』注釈史をめぐって——

渡 辺 正 人

古典というものの特徴でもあるが、この『日本書紀』という書物は、あるいは『古事記』も、時代の流れの中で様々に読み解かれていく書物であつて、必ずしも書かれたときの真意が後の世には的確に伝わっていない。というよりも、的確に読むということを時代は求めておらず、いかようにも読めるというような状況でこそ古典として生き残っているのだろう。

そういう意味で『日本書紀』はずっと読み続けられて、そして様々に読み解かれてきた。そこで本稿では『日本書紀』がどのように読まれてきたのか、ということについて述べてみたいと思う。

これまで、『古事記』の研究というのは江戸時代の国学以来、今に至るまで長く行われてきた。国学の研究については、問題のある点もあるが、本居宣長の『古事記伝』を初めとする優れた成果も少なくない。それに対して、『日本書紀』の研究というのは歴史だけは、遙かに長く行われてきている。『日本書紀』が養老四年（七二〇）に撰進されてから、どの時代でも『日本書紀』の研究はほぼずっと続けられてきているのである。

しかし、後述するが、中世などになって神仏習合の中で繰り広げられる『日本書紀』の研究はこじつけや文脈からかなり離れた読みがなされており（その時代にとっては重要な営為であるのだが）、その態度は学問的とはいえない内容になっているために慎重を要する。その意味で、研究の過程が複雑である点、注意が必要だろう。だが、その複雑さが、むしろ『日本書紀』というものの歴史的な位置をよく物語っているともいえるのである。

こうした『日本書紀』の研究の足跡を大きく分けると、幾つかのブロックに分けられると考えられる。まずは簡単にたどっておきたい。

最初は、養老四年（七二〇）の翌年に、早くも『日本書紀』の講書がおこなわれたとされ、それをはじめとする講書の段階である。これはその後弘仁三年（八一二）、承和十年（八四三）、元慶二年（八七八）、延喜四年（九〇四）、承平六年（九三六）、康保二年（九六五）、と続き、合計七回の講書が行われている。これは太政官の内部で行われている宮中の公式な行事でもあった。内容的には、そこでの私記の存在が知られており、それによれば主に訓読の仕方、語義についてなどの質疑応答が中心で師説の伝授といった性格の強いものと推察される。ほぼこの時期まで、十世紀の半ばくらいまでが最初のグループとして措定できよう。これは、ちょうど『六国史』最後である『日本三大実録』の編纂からおよそ半世紀を経ており、国史への関心とほぼ重なっていると見てよい。坂本太郎氏によれば、こうした『六国史』の編纂時期と講書がほぼ同時なため、関連があると指摘している^①。

次がちょうどその後あたりの十一世紀ごろから十二世紀ごろまでになるだろう。紫式部の『紫式部日記』によれば、紫式部が「日本紀の御局」と呼ばれたことが記されているが、この寛弘七年（一〇一〇）あたりから、嘉承元年（一一〇六）の大江山房の『江談抄』に匡房が『日本書紀』を読んだことが記されており、この十二世紀の頭くらいまでがひ

とつのブロックと考えられる。この二ブロック目は何かと言うと、『日本書紀』が忘れられた時代とでもいうべきだろうか。たとえば、紫式部の『源氏物語』の台詞に「日本紀などは、ただ片そぼぞかし。」と、『日本書紀』をちよつと軽くあしらっているところがある。これは物語論とのかかわりなので、完全に軽視と言えるかどうか分らないが、存在が軽くなっていることは確かであろう。それから『江談抄』では、匡房が『日本書紀』を読んだは読んだのだけれども、きちんと全部読んでいないと自分で書いている。匡房というのは、この十二世紀当代きつての博学で知られた男である。ところが、その大江匡房ほどの国一番の博学な人間ですら、『日本書紀』をきちんとは読んでいないという、そんな忘れられた時代が一世紀ほど続いているのである。

その次は十二世紀の半ば近くになって、再評価の兆しが見えてくる。『大鏡』では序文に「けふの説法は、菩提のためとおぼし、翁らが説く事をは、日本紀きくとおぼすばかりぞかし」とあり、ありがたいものとして『日本書紀』が意識されてきていることが分かる。そして大治四年（一一二九）に源俊頼の『俊頼髓脳』がなるのだが、この辺から承元元年（一二〇七）の顕昭の『日本紀歌註』と、この辺くらいまでのほぼ一世紀は多くの歌学書に『日本書紀』が引用されるということで、歌の世界に『日本書紀』が取り込まれる時代となる。基本的にはこの歌の世界に『日本書紀』が入り込んでくる時代だといえよう。

次に、承久二年（一二二〇）に慈円の『愚管抄』が登場する。このブロックはちよつと長い間で、そこから十六世紀の末から十七世紀初頭あたりまでになろうか。江戸時代になって国学が起こつてくるようになるまでの期間といつてよい。このあたりまでが中世神道の時代として、十三世紀から十七世紀までの間、ずっと『日本書紀』が中心として利用され続ける時代である。そして『日本書紀』が宗教の中心となったのがこの時代である。

最後が、いわゆる近世の国学、あるいは近世神道の研究の時代として、以降、江戸時代の終わりくらいまで『日本書紀』の研究が続くというブロックである。江戸時代に入って、あるいは慶長勅版の『日本書紀』が出たことで随分状況が変わったといえる。

こうしてみると、ごく大雑把に言えば、国家の正史として作られた『日本書紀』が、やがて律令政体制の緩みと同時に一度は読まれなくなる。一度は読まれなくなるが、やがて和歌の世界に取り込まれていって、その和歌の世界と結びつくことによつて、今度は日本の思想や宗教の世界、表舞台に登場する。もちろん、この前にも宗教の部分としてかわってくるものはあるが、少なくとも著述の面では、そういうふうに分けることができるのである。そして十三世紀から十七世紀までの長い間にかけて、いわゆる中世の神道の中心として『日本書紀』がずっと読まれ続け、研究も続けられてくる。それを承けて、近世に入り国学が研究を進めていく、ということになるうか。

さて、こうした流れの中で、いくつか取り上げて『日本書紀』の読まれ方、位置について述べていってみたい。

まずは、『日本書紀』と和歌の関係についてであるが、それまでの講書などの段階では史書として読まれてきていたものが、その後、大きく転換するポイントとしては、この和歌との結びつきが考えられる。きつかけとなるのは、講書の後に開かれた竟宴に際して詠まれた和歌、日本紀竟宴和歌の存在がある。この竟宴和歌の位置づけについては、その行われた時代における意義と、それが後代に与えた影響という意義とによつてかわってくるのだと考えられるが、しかしいずれにせよ『日本書紀』と和歌との結びつきのポイントはここにある。その後、講書が継続する中、『古今和歌集』が選定され、この序文に和歌の起源が神世に求められたことによつて、それが決定づけられたといつてよい。

その辺のことについて、伊藤正義氏は、

ふつう日本紀研究の流れは、『日本紀私記』『釈日本紀』あたりをはじめとして、北畠親房、忌部正通、良遍、了誉、一条兼良から吉田家へとつないで説かれるようであるが、その親房にしても了誉にしても、あるいは兼良にしても、日本紀と古今集序について強い関心を抱いている。すなわち親房の場合、延元四年ないし興国四年の『神皇正統記』著述があり、その神代の記については、およそ五十年ほどの間に急速に昂まった伊勢神道理論の研究、検討に基づく成果を見せているし歿年に近い正中年中には『古今集序註』が成った。その経過は了誉の場合にも同様であり、応永五年の『日本紀私鈔』にひきつづき、八年後の応永十三年に『古今集序註』があらわされているのである。これはおそらく偶然ではあるまい。日本紀、とりわけ神代紀と古今集序とは、同じ次元で考えられるべき性格があるのである。

と指摘している。^② 事実、『古今和歌集』の仮名序には

この歌、天地の開闢初まりける時より、出来にけり。(天浮橋の下にて女神、男神と成り給へる事を、言へる歌なり。)しかあれども、世に伝はる事は、ひさかたの天にしては、下照姫に初まり、(下照姫とは、天稚御子の妻なり。兄の神の形、岡、谷に映りて、輝くを詠めるえびす歌なるべし。これらは文字の数も定まらず、歌の様にも有らむ事ども也。)あらかねの地にしては、素盞烏尊よりぞ、起りける。ちはやぶる神世には、歌の文字定まらず、素直にして、事の心分き難かりけらし。人の世と成りて、素盞烏尊よりぞ、三十文字あまり一文字は、詠みける。(素盞烏尊は、天照大神の兄也。女と住み給はむとて、出雲の国に、宮造

りし給ふ時に、その所に、八色の雲の立つを見て、詠み給へるなり。八雲立つ出雲八重垣妻籠めに造るその八重垣を。）

かくてぞ、花を賞で、鳥を羨み、霞を哀れび、露を悲しぶ心、言葉多く、さまさまに成りにける。遠き所も、出立つ足下より始まりて、年月を渡り、高き山も、麓の塵泥より成りて、天雲棚引くまで生ひ昇れるごとくに、この歌も、かくのごとくなるべし。

というように、天地の開闢から和歌があつて、しかも神話の世界の中で既に読まれているということが考えられている。このように延喜五年（九〇五）の『古今和歌集』の時点から、『日本書紀』の歴史と和歌というのは結びついているのである。

しかし、問題なのは、和歌の解釈の中に『日本書紀』がもちこまれるにしても、それがいい加減に読まれているという点である。いい加減というよりも、要するに読み替えられていつて、漢文のきちつとした原典をそのままに読むのではなく、アバウトに読んでいくようになる。

こうした態度は先の日本紀竟宴和歌の左注にもみることができ。日本紀竟宴和歌というのは、現在万葉仮名で書かれた歌と書き下した歌、そして左注の部分から成る。しかし、竟宴当時は歌だけで、左注は後代になって付けられたものと考えられている。その時期は、和歌に『日本書紀』が取り込まれようとしていくちょうどこの時期になって、藤原顕輔がつけたものとされている。ところが、この左注は、基本的には『日本書紀』をうまく要約しているのだが、ところによりずれている部分が見られるのである。あるいはずれていないにしても、要約されているわけだから抜けている部分があるわけで、既に『日本書紀』の世界とは違うものが現出していることになる。

そしてなんとなく『日本書紀』的な世界として日本の歴史、あるいは神話の世界をすべて『日本書紀』の世界として読み込んでしまうことがあるのである。

たとえば、

去んぬる弘長年中、太神宮へ詣でて侍しに、或る社官の語しは、當社に三寶の御名を忌み、御殿近くは僧なども詣でぬ事は、昔此の国未だなかりける時、大海の底に大日の印文ありけるにより、太神宮御鉾指し下してさぐり給ける。其の鉾の滴り、露の如く也ける時、第六天魔王遙かに見て、「此の滴り国と成りて、仏法流布し、人倫生死を出べき相あり。」とて、失はん為に下りけるを、太神宮、魔王に会い給て、「われ三寶の名もいはじ、我が身にも近づけじ、とくとく帰り上り給へ」と、誘へ給ければ帰りにつけり。其約束を違へじとて、僧など御殿近く参らず。社壇にしては、経をもあらはには持ず。三寶の名をも正しく謂はず。仏をば立すくみ、経をば染紙、僧をば髪長、堂をばこりたきなどいひて、外には仏法を憂き事にし、内には深く三寶を守り給ふ事にて御座ます故に、我が国の仏法、偏へに太神宮の御守護によれり。(後略)

という『沙石集』の一節がある。伊勢神宮に僧が参拝したときに、ある社官から聞いた話として、伊勢神宮の御殿に僧が近づけないのは日本国ができたときに第六天魔王が仏法を忌避して国の創成をじやましようとしたところ、太神宮(天照大神)が三寶の御名も唱えない、僧も近づけないので、そのままにしておいて欲しいと頼んで事なきをえたのだ、そこで「外には仏法を憂き事にし、内には深く三寶を守り給ふ事にて御座ます故に、我が国の仏法、偏へに太神宮の御守護によれり。」というのだ、という。

ここにはいろいろな問題が含まれているが、さしあたつては、日本国の創成という神話的事実が神仏習合の中で自由に読み替えられてしまつてゐる、ということを確認しておきたい。『日本書紀』では国を創成するのはイザナキ・イザナミの両神であるし、『沙石集』では海の底から国を得るのではなく、大日の印文があつてそれをさぐるものが目的になつてゐる。銚のしずくは結果的に国になるのであつて、国を作るために銚を指しくだったのではない。また、一番大きな違いは、第六天魔王というものが登場してゐることである。

このように伊勢神宮の権威付けのために神話は自由に読み替えられ、変質していくのである。そして、こうした神話伝承がどこからもたらされたのか、というところはやはり出典のひとつとしては『日本書紀』があると考えられるのである。『古事記』という書物は、よく知られてゐるように作られてから歴史の表舞台に登場してくるのに時間がかかつてゐる。ほとんど知られてゐない書物だつたといつてよいものであつた。それに対して『日本書紀』は、先にも素描したように講書なども行われ、和歌の世界にも参入してゐるから、ひとときは軽く扱われる時代もあつたようだが、全般的にはよく知られてゐたし、正史の最初として尊重されてゐた。だから、こうした伝承が取り込まれるとき、母胎となる神話的伝承は当然『日本書紀』の可能性の方が高いのだといえよう。また、『旧事本紀』も平安朝では『古事記』よりも流布した書物であり、これら変質した神話の出典としてはこの『日本書紀』と『旧事本紀』のふたつが想定されてゐるのである。

更に問題となるのは、ここには『日本書紀』いわく「というふうには書いてないが、そのほかに『日本書紀』にはこういうことが書いてある」というふうに堂々と述べられてゐるものが多く存在することである。いうまでもなく、『日本書紀』という正史の権威にその事実性を保証してもらおうということであるが、その内容は『沙石集』のこうした神話とよく似ていて、かなり自由な読み替えが試みられてゐる場合が多い。それでも、原典である漢文の『日本書紀』から取材してゐるのならまだしも、原典はあまり読まれておらず、仮名書きになつたものや先の日本紀竟宴和歌の左注

がそのまま『日本書紀』として伝わっていく、といったようなことが見られるのである。あるいは、既に変質してしまつたものが『日本書紀』として提示され、それがそのまま『日本書紀』として伝わっていくこともあつた。つまり、この時期『日本書紀』は固有名詞ではなく、ある漠然とした世界を指し示すことばへと変化していったのである。

そこでは『日本書紀』をそのまま読んでいるのではなく、かなりいろいろなものを交えながら、歌の世界、宗教の世界、仏教の世界、思想の世界などいろいろなものを交えながら『日本書紀』を読み込んでいくという営為が行われているのである。

さて、次に『日本書紀』を読み解いていく過程の中で、神仏習合とのかかわりというのが出てくることになる。そのことについて触れておきたい。

最近の研究では、神仏習合というのはむろん宗教の問題ではあるのだが、もうひとつ、歴史学の分野からは社会の問題としてとらえる傾向が強くなつてきているという点がひとつ注目すべき事だと思われる。それから、神仏習合というとき、どちらがどちらを取り込んでいくのか、という方向性が問題になるが、基本的には仏教の側から神仏習合が進められてきたということ、それが大事かと思われる。

まず、社会の問題という点だが、それは古代社会の変革にともなう社会的要求によつて神仏習合が行われていくことである。その当初として有名な出来事に天平宝字七年（七三六）の多度大神の託宣がある。

我は多度の神なり。吾れ久劫を経て、重き罪業をなし、神道の報いを受く。いま冀（こいねがわく）ば永く神の身を離れんがために、三宝に帰依せんと欲す

という託宣だが、これについては神宮寺の出現と深く関わっているのだという。それは、その土地の支配層が神宮寺の設立へ動き始めるところからはじまる。その辺に事情について、義江氏はこう述べている³⁾。

律令国家という王権のもとに国土と人民のすべてを直接的・集中的かつ効果的に所有できるシステムをつくり上げることで、推古朝までにめばえていた所有と支配の罪の意識が王権と官僚貴族全般に一挙にひろがたからであつた。とすれば、個我と所有・支配の罪業意識は、当然ながら、それが生まれる以前の共同体とその神信仰の意識に大きな影響を与えずにはおかぬ。

すなわち、王権と官僚貴族は、ひろく、神と共同体の名を借りて私的に土地を所有し、人々を支配していることに気づき、それゆえにその手段となつてゐる神の告げというかたちで、神々の名をかたつて罪業の数々を告白し、神々を仏教に帰依させて菩薩にさせ、そのための伽藍すなわち神宮寺を建てる方向へ動き出す。

と説明している。つまり、その土地の支配者たちは、共同体的司祭者から私的領主へと生まれ変わつてゆくのだが、そのとき、それまで行つてきた私富の蓄積は共同体のためという大義名分を失い、罪業意識の自覚へと結びついていくのだという。その支配層の苦悩が神に託され、こうした託宣となつて表れてくるのだというのである。

このように、まず、神仏習合は社会的な変革の動きの中で共同体の変質と共に表れてくるのだという。そのことはいろいろな意味で進んでいつて、在来の支配者層にはとどまらない。

十世紀に承平・天慶の乱が起こり、そして平定されるが、このころから荘園の乱立が始まり、権門への集中化が進むとされる。権門への集中化が進むというのは、結局、主として旧仏教の寺院への集中化が進むということでもある。そ

ういう旧仏教の寺院が、莊園領主となつていくことの意味合いは何なのかというと、今まで律令体制の中で、公の寺としていた場合には、運営に必要なお金などは国から来るので、民を支配するということがなかった。ところが、莊園領主へと変化していくと、税を取るために、そこに住み暮らしている民と向かい合わなければならない。その民の世界というのは農業の世界を中心としたものであるから、その土地の神や、四季の運行を司る神、雨を願うとか豊作を祈願するという世界でもある。その世界に接近するということは、またそうした神の世界に近づく必要が出て来るということでもあったのである。

このように日本の共同体が、神の世界と関わる共同体から出発してゆくわけだが、農業主体の共同体において祭祀の存在は欠かせないものであった。そして律令体制が到来しても、日本の律令制はその在地の共同体祭祀を国家規模で吸収し展開してゆくことを基盤としていたから、その本質はなんら変わるところがなかったのである。だから、寺院が莊園領主へと変貌しても、祭祀の継続は必要だった。それゆえに、結局はやはり神は仏に姿を変えたにしても、なくなることはなかったのである。

いずれにしても、そうして十一世紀から十二世紀くらいにかけて、旧仏教が神道を完全に取り込み終え、そして十三世紀はじめころ、日吉神社の山王神道が起こつてくる。山王神道というのは天台宗の側からの解釈である。あるいは十二世紀の終わりころには「中臣祓訓解」ができてくるが、これは真言宗の方からの解釈である。つまり、台密と東密の両方で、この十二世紀の終わりから十三世紀のはじめにかけて、完全に旧仏教の勢力が神道の成果を取り込んで、公式的に神仏習合が認知されていくようになるのである。

そして、今度はそのすぐ後、文永五年（一二六三）に「神道五部書」と呼ばれる伊勢神宮の度会一族が作った神道書ができ、神道が独立した動きを見せるようになってくる。これは旧仏教が神道を取り込む、という神仏習合の動きの中

で、存在意義を見出した神道が、取り込まれると同時にその動きを利用して自立していくために動いていく。以降、神道の側から教義が整備されたりして中世神道が発展する時期を迎えることになるのであった。

もちろんこれは宗教の動きでもあるが、その背景には、度重なる戦乱、特に元寇がある。文永・弘安の役はそれぞれ一二七四年と一二八一年であり、このときに神仏に祈願し神風が吹いたという。これが追い風となつて、神道は復権の波にのるのである。

また、それから、慈円の『愚管抄』も、天皇が百代で終わつてしまふ百王思想を明確にしているが、末法とか百王という思想とも、恐らくこの前後で、そうした神道が表に飛び出してくる一つの理由になっているのだろうと考えられている。このような社会的な背景を機に神道の動きはみていかなければならないのである。

さて、こうした動きと『日本書紀』との関係だが、「中臣祓訓解」などでは、『日本書紀』そのものは利用されないのだが、その後の「神道五部書」は完全に『日本書紀』を使っている。ちょうどそのころの度会家行は著作に『珊瑚集』などがあるが、ここでは『日本書紀』を引用している。恐らく、伊勢神道、度会神道のターニングポイントの人間がこの度会家行という人なのだと思う。この辺りから後は、完全に神道家の中で『日本書紀』を利用するようになってきて、さらに卜部家、吉田家が出てくる。その結果、卜部家、吉田家、そして度会家というところで『日本書紀』がどんどん引用されていくというような流れができてくる。

だから、神仏習合が終わつたくらいのところから『日本書紀』がむしろ登場してくるということが言えるわけで、『日本書紀』そのものが神仏習合にどれだけ直接的な影響を与えたかということ、今の段階ではよく分かっていないといえよう。今回は、逆に言えば神道の聖典のひとつとされる『日本書紀』が、むしろ神仏習合が済み、神道の再編、あるいは社会的な役割などが転換し終わってから神道的に発見される書物である、ということを確認しておきたい。神

道の教義がこの中世になって始めて整備されてくることは自明のことだが、なぜそうなのか、についてはまだ不明な点が多いと言えよう。おそらくは、今回素描してきたような日本の共同体の変質の歴史や王権の歴史と不可分のものにはちがいはあるまい。今回はその指摘にとどめておき、詳細は他日を期したいと思う。

以上、簡単ではあるが、『日本書紀』がどのように読まれてきたのか、ということについての報告を終えたいと思う。

本報告は、聖学院大学総合研究所「グローバリゼーションの文脈における日本研究」第六回発表（一九九八年十二月十四日 於・女子聖学院翠耀会）のうち、後半部についてをまとめたものである。

また、次に付す『日本書紀』享受史年表は、日本書紀に関する出来事を管見に触れた限りでまとめたものである。遺漏も多いかと思うが、御寛恕いただきたい。

注

- (1) 坂本太郎『六国史』吉川弘文館
- (2) 伊藤正義「中世日本紀の輪郭——太平記における卜部兼員説をめぐって——」『文学』40—10 一九七四
- (3) 義江彰夫『神仏習合』岩波書店 一九九六

『日本書紀』享受史年表（暫定版）

作成・渡辺 正人

五五二	大宝元年
七〇一	和銅三年
七二〇	養老四年
七二一	養老五年
七三六	天平宝字七年
七五二	天平勝宝四年
七八八	延暦七年
七九四	延暦十三年

欽明天皇十三年仏教伝来（『元興寺縁起并流記資財帳』によれば五三八年）

大宝律令なる。

平城京に遷都。

舍人親王ら『日本書紀』撰進

『日本書紀』講書おこなわれるか。

多度大神の託宣「我は多度の神なり。吾れ久劫を経て、重き罪業をなし、神道の報いを受く。いま冀（ねがわく）ば永く神の身を離れんがために、三宝に帰依せんと欲す。」

東大寺大仏開眼供養

最澄比叡山に一乗止観院（後の延暦寺）を建てる。

平安京に遷都。奈良朝末から平安初期にかけて『日本書紀』（『佐々木信綱旧蔵卷一神代

七九七	延暦十六年
八〇四	延暦二十三年
八〇五	延暦二十四年
八〇六	大同元年
八〇七	大同二年
八一二	弘仁三年
八一五	弘仁六年
八一六	弘仁七年
八三〇	天長七年
八四〇	承和七年
八四三	承和十年
八六九	貞觀十一年
八七八	元慶二年
八七九	元慶三年
八八八	寛平元年

上断簡」書写される。「猪熊本卷一神代上断簡」「四天王寺本卷一神代上断簡」「田中本卷十」もこのころか。

菅野真道ら『続日本紀』撰進

『延暦儀式帳』（『皇太神宮儀式帳』と『止由氣宮儀式帳』を合わせたもの）太政官に提出される。

最澄帰朝し、天台宗を創む。

空海帰朝し、真言宗を創む。

斎部広成『古語拾遺』

『日本書紀』講書。弘仁私記序あり。

万多親王ら『新撰姓氏録』

空海、高野山金剛峰寺創建。

卜部遠繼『新撰亀相記』なるという。

藤原冬嗣ら『日本後紀』撰進

『日本書紀』講書

藤原良房ら『続日本後紀』撰進。このころひらがなあらわれる。

『日本書紀』講書。六年に日本紀寛宴和歌。

藤原基経ら『日本文徳天皇実録』撰進

寛平延喜のころ、『日本書紀』（岩崎本）書写される。

八九二 寛平四年

九〇一 延喜元年

九〇二 延喜二年

九〇四 延喜四年

九〇五 延喜五年

九三三 承平四年

九三五 承平五年

九三六 承平六年

九三八 天慶元年

九四一 天慶四年

九五八 天徳二年

九六五 康保二年

九八四 永観二年

九八五 寛和元年

一〇一〇頃 寛弘七年

一〇一一頃 寛弘八年

菅原道真『類聚国史』選上

藤原時平ら『日本三代実録』撰進

初めて荘園整理の令を下す。

『日本書紀』講書。公望私記あり。六年に日本紀竟宴和歌。

『古今和歌集』選上（勅撰集の最初）

源順『和名類聚抄』このころなる。『日本書紀』（『日本紀私記』？）の引用あり。

承平・天慶の乱始まる。

『日本書紀』講書。私記あり。天慶六年に日本紀竟宴和歌。

安和（く九六九）の頃、惟宗公方『本朝月令』なる。『日本書紀』の引用あり。空也、都で念仏を勧める（この頃より浄土教盛んになる）。

承平・天慶の乱、平定される。この頃、班田が行われず、荘園の乱立が始まる。

皇朝十二銭の最後「乾元大宝」が鑄造される。このころ、地方の荘園化が進む。また荘園の権門への集中が進む。

『日本書紀』講書

延喜二年（九〇二）以降の荘園を禁じる。

源信『往生要集』

紫式部『紫式部日記』。紫式部が「日本紀の御局」と呼ばれる。

紫式部『源氏物語』大部分ができる。蛩巻に「日本紀などは、ただ片そぼぞかし。」と

記す。

一〇四〇 長久元年

一〇四五 寛徳二年

一〇五一 永承六年

一〇五二 永承七年

一〇五五 天喜三年

一〇六九 延久元年

一〇七五 承保二年

一〇八三 永保三年

一〇八六 応徳三年

一一〇六 嘉承元年

一一一八 元永元年

一一二三頃 保安四年頃

一一二九 大治四年

一一四二 永治二年

一一五五頃 久寿〜平治

諸国の奏上による荘園停止などを命じる。

前任国司以後の荘園を禁じる。

前九年の役起こる。

この年より末法の世に入る。

寛徳二年（一〇四五）以降の荘園を禁じる。

再び寛徳二年（一〇四五）以降の荘園を禁じる。初めて記録荘園券契所を置く。

藤原教通没。教通は『日本書紀』（前田本）を所持。

後三年の役起こる。

白河上皇、院政を始める。

大江匡房『江談抄』。匡房が『日本書紀』を読んだことが記される。

藤原基俊「内大臣忠通歌合」において神代を典拠として歌を詠む。

『綺語抄』なる。『日本書紀』（？）の引用あり。

『大鏡』この前後になるか。序文に「けふの説法は、菩提のためとおぼし、翁らが説く事をば、日本紀きくとおぼすばかりぞかし。」と傾聴すべき歴史の代表として名があがる。

源俊頼『俊頼髓脳』

この年の奥付の『日本書紀』を、大江家が所持（宮内庁本）。後北畠家へ伝わる。

藤原通憲（信西）『日本紀抄』という著作あり。

一一五六 保元元年

一一五八 保元三年

一一五九 平治元年

一一六三 長寛元年

一一七〇 嘉応二年

一一七五 承安五年

一一七七 治承元年

一一八三 寿永二年

一一八五 文治元年

一一八六 文治二年

一一九一 建久二年

一一九四 建久五年

一二〇五 元久二年

一二〇七 承元元年

一二二〇 承久二年

一二二三 貞応二年

一二二四 元仁元年

保元の乱

藤原範兼『和歌童蒙抄』このころ。『日本書紀』の引用あり。

平治の乱

清原頼業『長寛勘文』に『日本書紀』を引用する。

寂超『今鏡』この年以後になる。『日本書紀』（日本紀寛宴和歌）の引用あり。

法然（源空）、専修念仏（浄土宗）を唱える。

藤原清輔『奥儀抄』『日本書紀』の引用あり。

顕昭『古今集序註』『日本書紀』の引用あり。

顕昭『袖中抄』文治年間になる。『日本書紀』の引用あり。

東大寺造営祈願のため、重源に率いられた六十人の東大寺衆徒が伊勢神宮へ参宮し、大般若

若経供養を行う。

この年以前に『中臣祓訓解』なる。栄西、禅宗（臨済宗）を伝える。

上覚『和歌色葉集』なる。

『新古今和歌集』撰進

顕昭『日本紀歌註』なる。この年、専修念仏を禁じ、法然を土佐へ、親鸞を越後に流す。

慈円『愚管抄』なる。『日本書紀』の引用あり。

山王神道『耀天記』なる。

この頃、親鸞、浄土真宗（一向宗）を広める。

一二二七	嘉祿三年
一二三五	嘉禎元年
一二三六	嘉禎二年
一二四三	寛元元年
一二四四	寛元二年
一二五三	建長五年
一二五六	康元元年
一二六三	文永元年
一二六八	文永五年
一二七四	文永十一年
一二七四	文永十一年
一二七六	健治二年
一二七八	弘安元年

道元、曹洞宗を伝える。

藤原定家『明月記』五月二〇日条「日本紀者、我朝之国史、尤可重。」

『日本書紀』（鴨脚本神代紀下）書写される。

ト部兼直、後嵯峨天皇に『日本書紀』を進講。

中原師光『師光年中行事』なる。『日本書紀』の引用あり。

日蓮、鎌倉で法華宗（日蓮宗）を広める。

度会家行誕生（一三五二）著作に『珊瑚集』『神祇秘鈔』など。著書に多く『日本書紀』を引用する。

文永・弘安の頃、神道五部書なるという。この五部書は永仁年間（一二九三～一二九九）まで禁書として非公開とされていた。

北条時宗、蒙古使を退く。

『天寿国曼陀羅繡帳縁起』発見される。ト部兼文、これに勘点をつける。この勘点文に

『日本書紀』の利用あり。

ト部兼文、翌年にかけて一条実経、家経らに『日本書紀』を講述。その後兼文の子、兼方が『釈日本紀』としてまとめる。この年、蒙古襲来（文永の役）。

一遍、時宗を唱える。

『勘仲記』弘安元年十月二十二日条に、藤原兼平らが宇治平等院にて『日本紀問答』を見る、と記される。また、弘安年間に寂恵『日本紀歌抄』なる。

一二七九

弘安二年

一二八〇

弘安三年

一二八一

弘安四年

一二八五

弘安八年

一二八六

弘安九年

一二八八

正応元年

一二九六

永仁四年

一二九九

正安元年

一三〇〇

正安二年

一三〇一

正安三年

一三〇三

乾元二年

一三〇四

嘉元二年

無住道曉『沙石集』起筆（一六年まで）。

資緒王、正月二十五日に源俊通に秘説を伝授し、『日本書紀』を授ける。また、この年七月十二日神祇伯資緒王が、後宇多天皇の東宮熙仁親王に『日本書紀』を進講。校点を施す。

蒙古襲来（弘安の役）

度会行忠『伊勢二所皇太神宮神名秘書』なる。このころ叡尊『三輪大明神縁起』なるか。三輪明神と天照大神同体説。『日本書紀』の引用あり。

卜部兼方、卜部家本を大江家本・卜部別本をもって校合、私記をもって校訂（卜部兼方本）。この本から一書を分注形式から並書形式に変更。また、この年通海『太神宮参詣記』なる。『日本書紀』の引用あり。

このころから一二九九までの永仁年間に兼方が『釈日本紀』をまとめる。

「皇」字をめぐる内宮外宮の争論から『皇字沙汰文』が出される。

この年以前に度会行忠『心御柱記』なる。

度会行忠『古老口実伝』なる。これに『大和葛城宝山記』が引かれており、この書の成立はそれ以前。

翌年にかけて資通王『釈日本紀』を書写か。

吉田兼夏、『日本書紀』神代巻を書写（卜部兼夏本）。

蓮恵、卜部家本を書写。また、道恵、源俊通の『日本書紀』を書写。

一三〇六	嘉元四年
一三〇九	延慶二年
一三一七	文保元年
一三二〇	元応二年
一三二四	正中元年？
一三二四	元享四年
一三二六	嘉暦元年
一三二八	嘉暦三年
一三二九	元徳元年
一三三一	元弘元年
一三三二	元弘二年
一三三三	元弘三年
一三三八	延元三年
一三三八	建武五年
一三三九	延元四年
一三四〇	暦応三年
一三四〇	延元五年

劔阿、源俊通の『日本書紀』を書写。

『春日権現験記』なる。

度会家行『神道簡要』なる。

度会家行『類聚神祇本源』なる。『日本書紀』の引用あり。

この年相伝の奥書のある『鼻版書』あり。

存覚『諸神本懐集』なる。

嘉暦年間（一二九）に『年中行事秘抄』なる。『日本書紀』の引用あり。

劔阿の伝授により、曇春が『日本書紀』神代巻を書写（水戸本）。

資継王、『釈日本紀』書写。

南北朝始まる。

慈遍『旧事本紀玄義』なる。

鎌倉幕府滅ぶ。慈遍『天地神祇審鎮要記』なる。

このころ北畠親房『元元集』なる。

吉田兼豊、この年五月から康永元年（一三四二）八月まで『日本書紀』を書写校点をほどこす。

北畠親房『神皇正統記』なる。『日本書紀』の名あり。

四月卜部兼員、花園法皇に『日本書紀』を進講。慈遍『豊葦原神風和記』なる。

北畠親房『職源抄』なる。

一三四六 正平元年

一三四七 正平二年

一三四八 貞和四年

一三四九 貞和五年

一三五二 文和元年

一三五四 文和三年

一三五六 延文元年

一三六六 貞治五年

一三六七 貞治六年

一三七一 応安四年

(建徳二年)

一三七三 応安六年

一三七七 永和三年

一三八一 永徳元年

一三八三 永徳三年

一三九二 元中九年

北畠親房『東家秘伝』なる。源顕能に『日本書紀』を授ける。

北畠親房『古今和歌集注』なる。

卜部兼員、『日本書紀』を進講(『日本書紀』古本集影)。

卜部兼員、『日本書紀』を進講(『日本書紀』古本集影)。資継王、卷五に加点。

資継王、卷三十に加点。

この頃から延文三年頃までに『神道集』なる。『日本書紀』(?)の引用あり。

資継王、卷十九に加点。

吉田兼熙『吉田家日記』十二月条に、為秀に『日本書紀和歌決釈』一卷を写して贈る、

ことが記される。

忌部正通『神代卷口訣』なる。

吉田兼熙、一条経嗣に『日本書紀』を伝授する。

吉田兼熙、二条良基に『日本書紀』を伝授する。

熱田円福寺住僧嚴阿、元年より熱田神宮へ『日本書紀』を奉納(熱田本)。

卜部兼敦、卜部本『日本書紀』を書写。

兼熙『吉田家日記』八月二十一日条に後龜山天皇より「日本紀自他家不可注進事」との

仰せがあったことが記される。

南北朝合一

(明徳三年)

一三九四

応永元年

一三九七

応永四年

一三九八

応永五年

一三九九

応永六年

一四〇一

応永八年

一四〇二

応永九年

一四〇三

応永十年

応永年間に応永本・玉屋本・三島本が書写される。

四月、卜部兼熙から一条経嗣へ『日本書紀』の秘説が伝授される。

吉田兼熙、吉田の斎屋の地鎮の祈禱として千度祓を修する。その際、『日本書紀』『古語拾遺』『延喜式』『龜兆伝』『龜経』等を安置する。また、祈禱のために『日本書紀』を読み合わせる。

良遍法印読師、頼瞬記『日本書紀第一聞書』

この頃、聖岡の『日本書紀私鈔』なる。聖岡には『麗氣記私鈔』『麗氣記拾遺鈔』もあり。

『吉田家日記』三月二十日条に卜部兼敦、後龜山上皇に『日本書紀』のことを尋ねられ、大概を言上する。また、その際上皇は元弘、建武依頼の世上の転変について語る。また、七月二十二日条に尊道親王に『日本書紀』のことを講談する。なお、坊城俊任の「百王」のことについて質問され、『日本書紀』の天孫降臨条の天壤無窮の神勅をひいて「百」とは「大勢」の意と説明する。十一月十四日条には日野重光の招請により『日本書紀』第一巻の読み合わせをする。

『吉田家日記』二月七日条に、卜部兼敦が天神七代地神五代天児屋根尊系図を左大将藤原満基に伝授することが記される。この年、日野重光の招請により残りの『日本書紀』を読み合わせする。十一月八日には花山院忠定、『日本書紀』の読み合わせをする。

一四〇四

応永十一年

恵観、尾崎遍照院祐偏の神代紀を書写する。

一四一九

応永二十六年

良遍『日本書紀』を講義。『日本書紀私見聞』となる。

一四二三

応永三十年

翌年にかけて道祥・春瑜・清恵らが『日本書紀』を書写（伊勢本）。

一四二四

応永三十一年

良遍『日本書紀』を講義。『神代卷私見聞』となる。

一四二六

応永三十三年

道祥が『日本書紀私見聞』を書写。

一四二八

応永三十五年

道祥が『日本書紀』を書写。

一四三五

永享七年

吉田兼俱誕生（一五一一）著作に『日本書紀聞書』『神道大意』『神道由来記』など。

一四四二

嘉吉二年

圓威『日本書紀』神代卷を書写。

一四五一

宝徳三年

一条兼良、卜部本を校合。

一四五五

康正元年

康正年間（一五七）に一条兼良『日本書紀纂疏』なる。

一四五六

康正二年

『四重秘釈』書写される。

一四六七

応仁元年

応仁の乱起こる（一七七まで）

一四七三

文明五年

六年にかけて奈良にて一条兼良、公卿、僧侶に『日本書紀』を進講。

一四七四

文明六年

一条兼良、奈良にて吉田兼俱の本により『日本書紀』を校訂。

一四七七

文明九年

吉田兼俱、『日本書紀』を講義。

一四七九

文明十一年頃

一条兼良の『小夜のねざめ』に『日本書紀』の名前がある。

一四八〇

文明十二年

吉田兼俱、後土御門天皇に読書始の儀にて進講。

一四八〇

文明十二年

四月、吉田兼俱、北野空成院にて進講。小槻雅久の聞書あり。

一四八四	文明十六年
一四八六	文明十八年
一四九〇	延徳二年
一四九六	明応五年
一四九九	明応八年
一五〇〇	明応八年
一五〇二	文亀二年
一五一三	永正十年
一五一九	永正十六年
一五二二	大永二年
一五二五	大永五年
一五二九	享禄二年
一五三三	天文二年
一五三九	天文八年

この年前後に吉田兼俱『唯一神道名法要集』なる。

吉田兼俱、二條持通邸にて『日本書紀』を進講。また、兼俱が足利義満に略述した『神道大意』なる。

十一月、吉田兼俱、権門円藏主に『日本書紀』を進講。またこの年兼俱が『中臣祓』を講義したものを、禅僧の景徐周麟が聞き書きした『中臣祓聞書』なる。

皇太神宮禰宜荒木田神主守辰、『日本書紀』（伊勢本）を書写。

卜部兼致、卜部本『日本書紀』を書写。

小槻雅久より雲門春蘭記室禅師に口決を授けた御巫本が書写。

吉田兼俱、一条家にて『日本書紀』を進講。

三條西実隆、翌年にかけて卜部本『日本書紀』を書写。

この年より天文五年（一五三六）までの間、卜部兼永『日本書紀』を書写する（北野本）。

卜部兼永『旧事紀』を書写する。

卜部家、『日本書紀』を焼失。

卜部兼右、実隆より『日本書紀』を借り書写。

二・十一月、清原宣賢、延暦寺・青蓮院などで『日本書紀』を進講。宣賢は晩年に越前一乗谷の寺院でも『日本書紀』を進講。

卜部兼右、翌年にかけて一条家の伝本などによって兼致の書写した『日本書紀』を校合

一五四〇

天文九年

一五四九

天文十八年

一五五五

弘治元年

一五六〇

永祿三年

一五七三

天正元年

一五七七

天正五年

一五八三

天正十一年

一五九〇

天正十八年

一五九五

文祿四年

一五九六

慶長元年

一五九九

慶長四年

一六〇三

慶長八年

一六一〇

慶長十五年

一六一五

元和元年

(兼右本)。また、書写本を作つて阿波加社神主卜部定澄に授ける。

卜部兼右、一条家の伝本などによつて『日本書紀』を校合。また、書写本を作つて阿波加社神主卜部定澄に授ける。

ザヴィエル、キリスト教を伝える。初めて楽市がおかれる。

弘治年間に遁齋野納『日本書紀』神代卷書写。

桶狭間の戦い。

信長、足利義昭を追ひ、室町幕府滅亡する。

日吉社禰宜祝部行丸『日吉社神道秘密記』なる。

林羅山誕生(一六五七)。著書に『神道伝授』。

秀吉、ほぼ全国統一する。

十二月二日、吉田兼見が後陽成天皇に『日本書紀』を進講。同年、『中臣祓』も進講。

慶長年間に熱法印祐伝、『日本書紀』神代卷を書写。

慶長勅版『日本書紀』刊行。清原国賢の跋に「君臣共以莫不窮此書矣。」

家康、征夷大將軍となり江戸に幕府を開く。

慶長活字本刊行

宗博、三條六角堂照高院殿にて『日本書紀』を進講。

度会延佳誕生(一六九〇)

吉川惟足誕生(一六九四)吉川神道を唱える。著書に『神道大意講談』。

一六一八	元和四年
一六四〇	寛永十七年
一六四四	正保元年
一六四八	慶安元年
一六五〇	慶安三年
一六六〇	万治三年
一六六四	寛文四年
一六七二	寛文十二年
一六七四	延宝二年
一六八九	元禄二年
一六九五	元禄八年
一六九七	元禄十年
一七〇〇	元禄十三年
一七〇四	元禄十七年
一七〇七	宝永四年
一七一五	享保二年
一七二〇	享保五年

山崎闇斎誕生（一六八二）。垂加神道を唱える。著書に『垂加文集』『垂加社語』『中臣祓風水草』など。
船橋宣賢『日本紀神代抄』刊行
正保年中（一四八）に林羅山『神道伝授』なる。
浄土宗の僧袋中『琉球神道記』刊行。
出口延佳『陽復記』なる。
徳川光圀『大日本史』編纂開始する。
清原国賢編『日本書紀神代合解』刊行
山本広足（度会延佳）録『神代卷講述抄』なる。
龍熙近『神代卷評註』なる。
吉川惟足講、田中宗得編『神代卷家伝聞書』なる。
松下見林『校訂神代卷』刊行
『神代卷直指詳解』刊行
契沖『日本紀竟宴和歌』を書写する。
貝原益軒『神祇訓』なる。
横山當永『日本書紀三元卷鈔解』なる。
丸山可澄『日本紀神代嵌註鈔』なる。高屋近文『神代卷訓義箋』なる。
跡部良賢『神代卷混沌草』なる。

一七二一

享保六年

一条兼良『日本書紀纂疏』刊行。小笠原友徳斎『神代卷訓釈』なる。伴部安崇『神武紀
墓草』なる。

一七二三

享保八年

伴部安崇『日本書紀一二之卷御統』なる。

一七二五

享保十年

この年から十二年頃までに玉木正英『玉籤集』なる。秘伝項目を『日本書紀』から採る。

一七三〇

享保十五年

松岡玄達『神代卷埴鈴草』なる。

一七三一

享保十六年

度会清在『日本書紀講述鈔』なる。伴部安崇『日本書紀考』なる。

一七三五

享保二十年

玉木正英講、植木惟敬記『神代卷磐根草』なる。伴部安崇『神代卷発端之説』なる。

一七三八

元文元年

吉見幸和『五部書説弁』なる。『神道五部書』を偽書とした。

一七三九

元文三年

岡田正利『日本紀事跡抄』なる。

一七四六

元文四年

玉木正英『神代卷藻塩草』刊行（成立は未詳。生没年は一六七〇〜一七三六）

一七四七

延享三年

山崎嘉、浅見綱斎所録『神代卷講義』なる。

一七四七

延享四年

久志本常彰『神代卷講義』書写。

一七六四

明和元年

本居宣長『古事記伝』着手。寛政十年（一七九八）にいたる。

一七六二

宝暦十二年

谷川士清『日本書紀通証』刊行

一七七八

安永七年

伊勢貞文『日本紀神代卷獨見』なる。

一七八五

天明五年

河村秀根『書紀集解』なる。

一七八八

天明八年

慈雲『無題抄』なる。慈雲は雲伝神道を唱える。著書『神儒偶談』『相承神道儀』など。

一七九〇

寛政二年

本居宣長『古事記伝』刊行開始

一七九三	寛政五年
一七九五	寛政七年
一七九八	寛政十年
一七九九	寛政十一年
一八〇四	文化元年
一八一	文化八年
一八一七	文化十四年
一八二二	文政五年
一八三三	天保四年
一八四三	天保十四年
一八四四	弘化元年
一八四六	弘化三年
一八六二	文久二年
一八六三	文久三年
一八六七	慶応三年

小寺清先『日本書紀』刊行
清原春岑『神代卷塩土伝』なる。
本居宣長『神代紀鬚華山蔭』なる。十二年刊行。
新井白石『日本書紀古事記考三條』
栄名井広聡『神代卷清地伝』なる。
内山眞籠『日本紀類聚解』なる。栗田土満『神代紀葦牙』なる。
小野高潔『日本書紀諸本異同考証』なる。
井岡茂卿『神代卷神秘剪紙伝』なる。
『日本紀竟宴和歌』刊行
得能秀眞『神代卷秀眞政伝』なる。
橘守部『稜威道別』なる。
橘守部『神代直語』なる。
鈴木重胤『日本書紀伝』なる。
立野良道『日本紀考異』なる。
大政奉還